



世界の鶏卵状況

IEC京都大会レポート

IEC[※]は鶏卵市場の食品衛生推進、国際的な鶏卵市場の調査や課題の解決、鶏卵の普及・消費拡大などを目的にしている。IECは年2回総会を開催しており、今回は9月に京都で開催された一部を紹介する。

※International Egg Commission: 国際鶏卵委員会

全農飼料畜産中央研究所 養鶏研究室

日本の鶏卵消費量は、世界第2位の年間333個

IEC加盟国33カ国の2017年における1人あたりの鶏卵消費個数の平均は、225個。日本は昨年より2個消費を伸ばし、世界第2位(333個)である。地域別に見ると北米・南米で多く(272個)消費され、アフリカが最も低かった(198個)(図1)。前年より20カ国が鶏卵消費数を伸ばしている。

飼養形態の状況

IEC加盟国で飼養形態の調査を行ったところ、日本ではケージ

飼いが主流であるが、欧州の場合約半数でケージ飼いにシフトしている(前年比-4.4%)(図2)。次いでニュージーランド、オーストラリア等のオセアニアでケージ飼いが進んでいる。

欧州の国が多く加盟しているため、加盟国の平均ケージ飼いは65.8%であるが、中国、インド等の羽数上位国はほぼケージ飼いのため、世界全体では90%を超えていると考えられる。一方、食品業界で多くの企業が25年までにケージフリー宣言をしている米国では、依然として86%(同一

3.0%)とケージ飼いに優位であるが、急速な減少傾向となっている。

一方、卵殻色の比率は、オセアニア・欧州圏で有色卵生産が多く、その他エリアは白色卵が多い状況である(図3)。昨年と比較して、欧州では有色卵比率が4.3%上昇しており、市場の変化が起こっているものの、その他エリアではほぼ変動はなかった。

人口増加問題とサステナビリティ

地球上の人口増加によって、良質な動物性タンパク質となる鶏卵・肉等の食糧生産がますます必要になる。50年までに気温上昇を1.5℃以内に収めるためには、GHG[※]排出量を全体で16年の51Gtから50年に13Gtまで縮小する必要があるが、人口増加に見合う畜産物生産を行うと、畜産業界の排出量は16年の7.1Gtから50年に10.5Gtまで増加すると予想される。

鶏卵は宗教上の影響が少なく全世界で増羽傾向にあり、今後鶏卵関係者は地球規模での環境保全、食の消費や安全性、人の健康等のサステナビリティ(持続可能性)を意識する事が重要である。

※Greenhouse gas: 温室効果ガス

図1. 2017年各国・地域鶏卵消費量

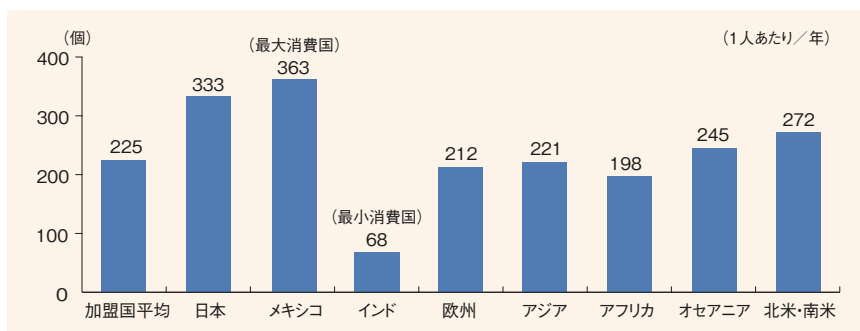


図2. 採卵鶏の飼養形態比率

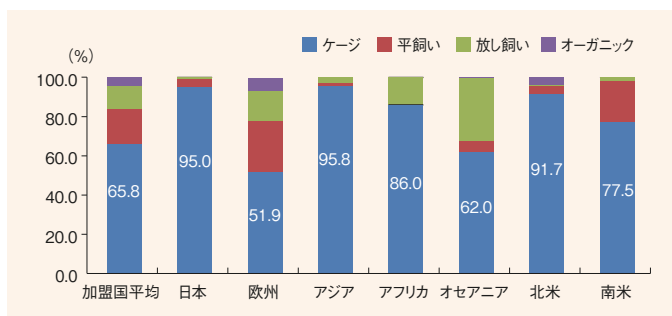


図3. 卵殻色比率

